



六日目の朝、階下から漂う香ばしい匂いで目が覚めた。

驚いて、寝衣しんいのまま階段をおりる。

「おはようございます」

「おはよう」

調理台にスマレが立っていた。

「本当に作ってくれたんですか？」

「まさか、疑ってたの？」

「いえ、そうではなくて……。本当にびっくりして」

「冗談だよ。もうすぐできるから座っていて」

「あの、ちゃんと寝ましたか？」

「少しだけ仮眠をとったよ」

「それならいいんですけど」

「おせっかい」

「スマレが心配なだけです」

彼が調理台にいることも、私がテーブルでそれを眺めていることも慣れない。

妙にそわそわしてしまう。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

目の前に置かれたお皿には、野菜と干し肉を炒めたもの。





それから卵をといたスープにパンも添えられていた。

「おいしそう。いただきます」

向かいに座ったスマレが、パンに炒めたものを乗せて食べているので、私も真似を試みる。

けれど、全然食べ慣れなくて、こぼしてしまった。

「小さい子みたい」

「そ、そんなことはないですよ！」

しかし口に広がる味は、今まで食べたどのご飯よりも――。

「おいしい……」

スマレのからかいに反論できず、ただそのおいしさに感動してしまった。



「よかった」

「――待ってください。もしかして今まで私が作ったご飯って、全然、まったく、おいしくなかったですか？」


「味はどうあれ、食事を作ってくれたことに感謝しているよ」

「それって全然フォローになってないです！」

「本当だよ。君の食事のおかげで傷が治ったし、食べるものがあるだけで幸せなんだ。ありがとう」











「それならよかったですけど、なんだか丸め込まれている  
気がします……」

続いて食べた卵スープも絶品だった。  
スマレの腕がいいのか、私が今までおいしいものを食べて  
こなかったのかはわからない。  
けれども、私にとって革命が起きたような、そんなご飯  
だった。

「お皿、洗いますね。ありがとうございます」  
「僕のほうこそ。いつも作ってくれてありがとう」  
「スマレのご飯がおいしすぎて、次から自分で作る気にな  
れませんね」  
「僕はマリーのスープも良いと思うけど」  
「本当に？ 本心で言ってますか？」  
「うん」  
「……信じますよ」  
「いいよ。最近は野菜の大きさも揃ってきてるし、味も安  
定してきている」  
「精進します……。でも、スマレのご飯、毎日食べたい  
なって思うくらいおいしかったです」

私の言葉に彼は笑っていた。  
お皿を洗い終えて振り返ると、スマレはテーブルに置いて  
ある花を描いていた。





「その花、小屋の裏に咲いてたんです。かわいいですよ  
ね」

「なんて花？」

「そういうのは全然知らないんです」

「医学の知識はあるのに」

「全然分野が違うじゃないですか」

「はは、そうだね」

「隣で見ててもいいですか？」

「たのしいものじゃないと思うけど」

「絶対、そんなことはないです」

「……わかったよ」

それから、スマレが描き終えるまで隣で眺めていた。

「できた」

「テーブルの花が絵の中にもあります……」

「変な感想」

「すごいってことです！ スマレは絵にタイトルをつけない  
んですか？」



「どうして？」

「画集で見たんです。どの絵にもタイトルがついていて、  
絵画ってそういうものだと思ってました」

「考えたことなかったな」

「せっかくだしつけてみませんか？」

「そう、だな。じゃあマリーも考えて。僕よりいろんなこ  
とを知ってると思うから」







「え！　わ、わかりました」

それから、二人で絵のタイトルを考える。  
とても穏やかで、たのしい時間だった。



夜になるころ、僕は作業に戻った。  
マリーが僕の部屋にあったシャベルを見つけてくれて、作  
業速度があがった。  
これなら明日には道が開くだろう。

夕飯も作ってほしいとお願いされたので、程よいところで  
切り上げる。  
井戸で体を洗い、小屋へ戻るとマリーはまだロフトにいる  
ようだった。

「マリー？」

声をかけても反応はなく、いよいよロフトの階段をのぼっ  
た。  
その気配で起きたのか、眠そうな声がする。

「スマレ……？」

「具合でも悪い？」

「いいえ……、ただ眠くて。もう夜なんですね」

「これから夕食作るけど、食べられそう？」





「はい」

マリーはベッドのそばにあるろうそくに火をつけた。  
暗かったロフトに明かりが灯る。  
周辺には本がたくさん散らばっていた。  
文字が読めない僕には、それがなんの本なのかはわからなかった。

「そうだ。明日の朝には道が開くよ」

「すごい、早いですね」

「シャベルのおかげだよ。それはそうと、君に聞きたいことがある」

「はい？」

「その肩の痣<sup>あざ</sup>。君は——魔女なの？」

半袖の寝衣がめくれて、マリーの肩が露わになっている。  
そこには見覚えのある痣があり、それに気づいた彼女は  
とっさに肩を隠した。



「あの、ご飯なんですが」

「うん」

「お願いしておいてすみません。今、食欲が……」

「わかった」





「このまま寝ます、ね」

「おやすみ」

「おやすみなさい……」

僕はロフトをおり、外へ出た。

そうして、明日の朝に間に合うように作業を再開したの  
だった。

